

ディベート活用のススメ、登場

瀧本哲史『武器としての決断思考』書評

天白達也

現代を生きるための「武器」マニュアル

今回紹介する本は、全国教室ディベート連盟事務局長・全日本ディベート連盟代表理事の瀧本哲史氏の手による『武器としての決断思考』（星海社新書）です。

瀧本氏は大学時代に競技ディベートに触れ、そこで鍛えた「決断思考」を生かして経営コンサルタントや投資業において大きな成果をあげています。氏はその成果を還元すべく、ディベート団体の役員を務めてディベート普及に取り組んでいるほか、今回の新書を上梓しています。

本書は、状況が日々刻々と変化し、定まった正解が存在しない現代社会で私たちが後悔しない人生を選び取るために必要な考え方として、ディベート的思考のコアとなるメリット・デメリットの分析方法を、豊富な事例と演習問題を通じて分かりやすく解説しているものです。実はこうした類書は乏しく、本書は初の「ディベートの基礎を学ぶ演習書」といえます。

以下でも改めて触れますが、本書の内容はディベートを通じて学ぶことができる思考様式の多くを凝縮したものであり、ディベートに興味のある人、議論に強くなりたい人は必読の新書といえます。また、既にディベートに取り組んでいる人にとっても、本書はディベートの基本を確認するとともに、ディベートの意義をより深く考えるためのきっかけとして有益なはずで

本稿は、現代社会を生きる「武器」としてディベート的思考を用いるためのマニュアルである本書について、その言わんとするところについて、評者の私見を交えつつ簡単に解説することで、本書の書評を行うものです。本書からは、これから

ディベートに取り組もうとする人向けのメッセージと、現在ディベートに取り組んでいる人に考えてほしいメッセージの2つを読み取ることができますので、以下の解説も、その両者に向けた内容となっております。

ディベートが武器たる所以

本書は「ディベートの本質」は『あるテーマに対して、賛否両論を自分の頭の中で整理する必要がある』（pp.16）ことである、と指摘します。

ディベートというと、相手を打ち負かすであるとか、議論を戦わせるというイメージがあり、競技として行う場合にはそのような場を設けていることも確かなのですが、ディベート経験のある方にはお分かりのとおり、試合でスピーチするための前段階には、テーマ（論題）について多角的に分析し、肯定論と否定論についてその論拠と反論を整理し、準備することが必要になってきます。これは、ディベートの試合を知らない人には見えない過程ですが、ディベートという取り組みで一番価値があるのは、実はこの部分です。

ディベート的思考というのは、自分の主張を行い、あるいは相手を批判するテクニックを指すものではなく、対立する複数の視点について、それを批判的に検証することにあります。なんとなくではなく、選択肢を吟味することを通じて合理的な選択をするための道具が、ディベート思考です。決まった答えがなく、自分で自分の生き方を選択しなければならない——より広い視野に立てば、私たちが住む国の将来を決めるのも、私たち一人一人の選択であり、実際に競技ディベートで議論されるテーマの多くもそうした「国家的課題」です——現代社会において、ディベート思考は、充

実した意思決定を通じてよりよい未来を選び取るために必須の「武器」となります。

もっとも、こうしたディベート的思考は、ディベートをやっていけば得られるというものではありません。ディベートの基本的な考え方を踏まえた取り組みでなければ考え方を身に着けることはできません。ディベートで行われているのが「意思決定のための議論」であることを意識し、どのような要素を議論する必要があるのかということをしちんと学んでこそ、ディベート的思考を身に着けることができます。もちろん本書では、そのための基本的な考え方が丁寧に解説されていますので、次にそれを見ていくことにします。

反論からメリット・デメリットを考える

本書は、ディベート思考を形作る具体的な考え方として、メリット・デメリットに基づいてテーマを分析する方法と、そのメリット・デメリットを構成する3つの要素について、「Aくんは就活を続けるべきか」といったテーマをはじめとした具体的な設例を通じて説明しています。

メリット・デメリットというと、ディベーターにはおなじみの考え方ですが、実際の選手のすべてがこの考え方を理解しているかというと、残念ながらそのようなことはありません。例えば、評者が審判を務める、中高生のディベート全国大会（ディベート甲子園）では、優勝を争うレベルのチームでも、「メリットやデメリットを証明する際のポイントを理解していれば、もっと良い議論が出来るのにもったいない」と思わせる議論を展開していることを見かけます。

これは、上述した考え方が難しすぎるからではなく、単に「体系的に学び切れていなかった」からだと思われるところで、本書を参考に学んでいくことで、誰でも理解することが可能です。幸いなことに、本書は中学生でも意欲があれば十分読解できる分かりやすいものであり、また新書なので値段的にもお求めやすくなっています。ディベ

ートに取り組みされている選手の方には、基本を確認するという意味でも、本書をお読みになった上で、これまで自分たちが作ってきた議論が基本的な考え方に沿っていたかどうか、チェックしてみてください。

もっとも、考え方を知っている（と思っている）ことと、実際に使えるようになるということは別物です。評者が見てきた「基本が抜けている」選手も、メリット・デメリットの考え方を知っているかと聞かれたら、みんな知っていると答えることでしょうし、本書が分かりやすいこともあって、第3章（3時間目）までをさらっと読んだディベート未経験者の中には、ついつい「わかったつもり」にとどまってしまう可能性があります。

この問題に対する本書の解答は、議論の作り方だけではなく壊し方も教える、ということにあります。本書の解説の特徴は、「反論という観点からディベート思考を考える」というコンセプトであり、一度議論を考えるだけでなく、それを反論の検討を通じて掘り下げるという形で、同じテーマの議論の復習を兼ねつつ、実際の議論に即した掘り下げの方法を教えてください。具体的には、メリット・デメリットの3要件に注目して反論を加える方法や、その反論に際して、議論のどこに着目して反論すればよいのかを考えるための「議論の構成要素」について、これも設例を交えて分かりやすく解説してあります。

反論の方法もセットで考えることによって、「自分の考えに自分で突っ込みを入れる」ことができるようになり、分かったつもりになることを防ぐことができます。意欲があれば、解説がない設例も含めて、本書で出てきた設例の議論に突っ込みを入れるトレーニングを行うことも可能です。本書にもありますが、『読書とは格闘技』（pp.135）であり、本書自身も突っ込みのトレーニング材料として使用されることが、そもそも予定されているのです。

本書を最後まで読まれた方であれば、こうした

本書の構成は、選択肢を検討して「最善解」を見つけてという意味決定の考え方から必然的にきているということがお分かりになるはずです。それだけでなく、反論中心の説明というのは、競技ディベートで「勝てる」議論を作るノウハウの中核的な考え方を反映させたものでもあります。反論を踏まえて、自分の議論を強化し、どの議論を出すか選ぶというのが、ディベートで強い議論を展開するためには必須の思考様式です。どこに着目し、どのような攻撃防御を重ね、それに備えてどういった立論を構築していくか…という思考の道具としてメリット・デメリットの考え方をスムーズに使えてこそ、ディベートの基本を本当に理解したといえるのです。そのような理解を着実なものにするためにも、ディベートの選手にこそ、本書をしっかり読んでいただきたいところです。

ただし、おそらく紙幅の関係もあり、本書の説明は、ディベートで（そして現実の意思決定で）役立つ考え方のすべてをフォローしたものではありません。例えば、テーマに対して「賛成」「反対」以外の「第三の道」を対案（カウンタープラン）として提案する議論の方法や、出てきた複数のメリット・デメリットを比較検討するための基準に関する議論についての説明は、本書では省かれています。こうした発展的な議論も含めて、ディベート的思考という「武器」を研ぐための方法について、少し触れておきます。

演習場としての競技ディベート

ディベートが意思決定の道具として威力ある「武器」であるということは、本書の一貫したメッセージです。そして、本書によって「武器」を手に入れた読者が次に考えるのが、この武器の切れ味をしっかり研ぎ澄まして、実践に備えるということではないでしょうか。

実際のところ、ディベートの基本的なさわりを知っているだけでもかなり役に立ちますし、「自分で考えて自分で決める」というあり方を心がける

だけで、局面を好転させることはかなりの程度可能ですが、決定の精度を高めたいのであれば、本書での紙上演習を離れた実践で経験を得る必要があります。しかし、意思決定が試されるような機会が日々めぐってくるような人ばかりではないし、本番の前に練習を積みたいと考えるのが普通の人間です。ではどうすればよいのか。その答えの一つが、競技ディベートに取り組むことです。

競技ディベートは、いわばゲームとして、政策の是非などについて議論を行うものであり、考え方のトレーニングを楽しく行うものとして、中学生から社会人までの幅広い選手層に向けて、様々な競技大会が用意されています。その中で最も大きい規模の大会は、全国の中高生が参加しているディベート甲子園でしょう。

こうした競技大会を目指してディベートを行うことは、おおむね3つの理由で、皆さまが手に入れた「武器」を強化する手助けとなります。

第一の理由は、ノーリスクで貴重な訓練の機会を得ることができるということです。本書でも挙げられている「就職活動を続けるべきかどうか」といったテーマは、人生を左右する重大なものですし、より小さな意思決定でも、例えばそれが仕事に関わるものであれば失敗は許されないわけで、ノーリスクでディベート的思考を鍛える機会には実はそんなにありません。一方、競技大会であれば、試合に負けるのは悔しくはあるものの、負けて何かを失うわけではありません。もちろん、適当にやっついては訓練にならないので勝ちに行く必要はありますが、失敗を恐れずトレーニングできるという意味で、競技ディベートはたいへん貴重な機会を与えてくれます。

第二の理由は、競技ディベートでは普段直面しない「大きな課題」や、ディベート的思考に習熟した「強敵」と対峙する機会があるということです。競技ディベートでは、首相公選制や原発廃止の是非など、日本の在り方を左右する政策について議論することになります。こうした問題におい

ては、複雑に絡まりあう様々な論点を検討する必要がありますが、高度な分析や価値判断が求められます。高度な負荷をかけてこそ、武器を鋭く研ぎ澄ますことができます。また、議論を戦わせる相手も、同じくディベートに取り組み、準備を重ねている選手ですから、自分たちの議論も激しい批判にさらされ、より精度の高い議論が要求されるという点で、ディベート的思考を鍛えてくれます。

第三の理由は、競技ディベートでは「ジャッジを説得する」という点で、本書が取り上げていない要素を鍛えることができます。おそらくは著者の第二の代表作に盛り込まれるであろう内容として、自分で考えた意思決定の内容を実現するために第三者を説得するための方法論がありますが、本書はディベートの中核的価値である「意思決定のための思考方法」に的を絞っており、人に働きかける要素は省かれています。しかし、ディベートの試合では、第三者であるジャッジを説得することが目的であるため、自分たちの側に投票してもらうための様々な工夫が行われます。

本稿で詳述することはできませんが、例えば単なるロジックを超えて「ジャッジに投票を迫る」ストーリーをどう説明するかといった点については、議論構築の段階から、綿密に検討される必要があります。実際にディベートを行い、人のスピーチを選手やジャッジの立場から聞くことにより、同じ内容の議論が展開方法でどのように変わってくるのか、どこに力点を置いてスピーチすることがジャッジを動かすのか、またジャッジごとの「好み」を読んで議論を選択する方法など、実践に活用できる様々な気づきを得ることができます。本書の内容を下敷きにしつつ、これを第三者への説得材料としてどのように展開していくかという方法論を学ぶ近道は、実際にジャッジを説得する必要がある競技ディベートに取り組むことだといえます。

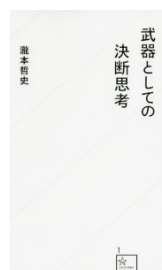
もし本書を読んで競技ディベートにも興味を持たれたという方は、筆者が役員を務める全国教室

ディベート連盟（中高生の大会）や全日本ディベート連盟（大学生・社会人の大会）にコンタクトを取ると、大会やディベート講座の案内を受けることができます。

本書を手にする・取った人へ

本書にもありますが、一番大切なことは、ディベートの手順そのものではなく、「自分の人生は、自分で考えて、自分で決めていく」ことです。本書を未読の方は、現代において意思決定が求められていることの重要性や、自分が意思決定をするための考え方に習熟しているかどうかということを見問自答した上で、「武器」を仕入れるべきか判断の上、必要に応じて本書をお買い求めください。本書が良質な「武器」を提供してくれるということについては、まず間違いありません。

しかし、より大事なことは、本書を読みっぱなしにするのではなく、自分で考えて実行するという実践に踏み出すということです。本書を読んだのであればきっと、今すぐ動き出すことが求められていることに気付くでしょう。もしその中で、意思決定の方法をもっと鍛えて、来るべき時に備えたいということを感じたのだとすれば、競技ディベートへの扉を進んでみてください。筆者が学生時代に得た「考え方の発見」を、追体験できるかもしれません。



武器としての決断思考

瀧本哲史（著）

講談社

ISBN: 978-4061385016